

日時：2016年5月12日（木）16時25分～16時55分

場所：総合教育研究棟 F棟 6階 羽鳥研究室

インタビュアー：松岡きらら（メディア・表現文化学4年）

インタビュイー：羽鳥隆英先生（人文学部助教）

羽鳥先生の研究内容について

学生：本日は取材にご協力頂き、ありがとうございます。はじめに、先生の研究内容を教えてください。

羽鳥：映画と演劇について研究しています。元々は日本映画、その中でも幕末や明治維新を描いた時代劇を研究していました。これが一番の研究の根幹で、大学院に入った2005年から約十年経った今年二月に『日本映画の大衆的想像力』という本を出版するというところまでできました。また最初の職場であった早稲田大学演劇博物館で新国劇という劇団の展覧会を担当したことがきっかけで演劇にも関心を持ち始め、映画と演劇の両方を勉強したいと思うようになりました。今は来年創立百周年を迎える新国劇についての研究に取り組んでいます。今後は一昨年亡くなった山口淑子さんの研究にも挑戦したいと考えています。



羽鳥隆英先生と、先生が執筆した論文が掲載されている『映画の中の社会／社会の中の映画』

羽鳥先生のご経歴について

学生：今も少しお話頂いたのですが、先生のご経歴について聞かせて下さい。

羽鳥：学部は通称 ICU、国際基督教大学で、大学院が京都大学です。最初の職場は前述の早稲田大学演劇博物館で、去年は神戸映画保存ネットワーク、そして今年から新潟大学なので、色々なところを行ったり来たりしている感じですね。

学生：ICU時代も、映画の勉強をされていたのですか？

羽鳥：ICUには映画の先生がいませんでした。なので、日本美術史が専門だけど、映画の卒論を書いてもいいよと言ってくれた先生のところで独学でやっていました。

学生：先生が映画に興味を持ったきっかけは何ですか？

羽鳥：我が家は三世代世帯だったのですが、祖父がとても映画好きな人でした。祖父は第一期の1920～30年代、第二期の1950～60年代という日本映画の黄金期を実際に知っている世代でした。そんな祖父の話の色々聞いているうちに、自然と昔の映画に親しんでいました。

学生：そんな先生が一番おすすめの映画があれば教えて頂きたいです。

羽鳥：半分冗談みたいな答えですけど、『あの夢この歌』という、戦後すぐに適当に作られた映画です（笑）。西條八十という大作詞家が出てくる作品ですが、自伝映画という訳ではなく、彼が東海道線の小田原か熱海あたりから東京行きの列車に乗ったら、たまたまそこに歌の好きな人や知り合いの歌手が乗っていて、東京に着くまでひたすら彼が作った流行歌を歌いまくるという映画です。最終的には、この元気で日本を復興しましょうというところに落ち着くのですが。監督は黒澤明とともに日本映画界の二大「天皇」の一人である渡辺邦男さんです。彼は、黒澤の完璧主義とは反対に、とにかく早く撮って水準以上の面白い映画を作る名人でした。今はあまり注目されていないけれども、そういうものこそ、当時は多くの観客が楽しんでいたという意味も込めて、この作品を紹介しました。一回見ただけなので、記憶違いもあるかもしれませんが（笑）。

新潟大学で担当している授業について

学生：次に、現在どのような講義をされているか教えて下さい。

羽鳥：今学期は人文総合演習を担当しています。これは大学に入ったばかりの一年生に、大学での勉強方法を身につけてもらうための授業です。とにかく実際にやってみるということを重視しています。大学で勉強する上でのルールに、やりながら慣れていこうという感じです。

学生：人文総合演習は、担当の先生によって、内容が多種多様なのですが、羽鳥先生の授業では、どのようなものを扱っていますか。

羽鳥：僕の授業では、各自に好きな映像を選んできてもらい、持ち時間20分の中にそれを上映しつつ自分なりの分析を発表し、さらに全員で議論するということを二回やります。まず中間発表を行い、そこでの議論を踏まえた上、なるべく同じ映像について、より考えを深めた最終発表を経て、さらに文章にまとめるという流れの予定です。僕が分析の深さよりも重視しているのは、例えば他人の意見を引用する際に出典が明記されているかというような書き方のマナーです。ICUは日本の大学の中でも珍しく、そういうことをきちんと教える大学でした。僕が実際に体験した訳ではないのですが、ICU時代に習ったことというと、アメリカでは注の付け方でちょっと手抜きしただけでも、学生にペナルティが課せられるそうです。日本ではそういうことがなあなあになっているところもあるので、そこをきちんとする姿勢を身につけてほしいですね。出典を明記するというのは、他人の意見を聞いた上で自分の意見が出てきたということの証明ですから、大切にしてほしいと思

います。

羽鳥先生の学生時代について

学生：先生はどのような学生時代を過ごしていましたか？

羽鳥：高校時代は野球部にいたのですが、正直いい思い出ではないですね（笑）。監督が自分の勝利欲ばかりを考えているような先生でしたから。たまたまそういう先生に出会ってしまったから、一回だけの高校野球生活がつまらないものになってしまったという思いが、今でも自分の中にあります。だから僕は教壇に立つにあたって、学生時代というのは一回しかないということを強く意識しています。正直に言えば、教員は今年上手くいかなかった部分を来年もう少し上手くやろうとすることができる。でも学生さんに来年もう一回同じ授業を聞く余裕はない。だから聞いている人が新潟大学に来て、僕の授業を受けてよかったと思うということを第一の目標にしています。それが僕の財産にもなるわけですから。

高校生と人文学部生へのメッセージをお願いします！

学生：最後に、高校生と人文学部生に向けてメッセージをお願いします。

羽鳥：やはり何事も自分で考えて、自分で決めるということが一番大切だと思いますね。僕は研究を仕事にし、怒られたり褒められたりしながらも、今こうして生活できていることに感謝していますが、元々は父親や叔父が大学教員で、身近に大学以外の職場の人があまりいない環境の中、ふわふわとこういう道に入ってきたような気がします。そのことを悩んだ時期もあって、本当にこの道を自分で選んだのかな、この道で生きていけるのかなと自問自答しました。だから皆さんには色々な経験をして、その中から自分の将来を自分で決めるということを意識して学生生活を送って欲しいですね。自分がこれで行く決めてその道に行く人は偉いと思います。

インタビューを終えて

幼い頃から身近にあり親しんできた映画、そして私達学生のことを考えた授業への思いを熱く語って下さった羽鳥先生。特に印象に残った「学生時代というのは一回しかない」というお言葉を胸に、より有意義な大学生活を送りたいと思いました。